

阿部泰郎著

## 『中世日本の宗教テキスト体系』

名古屋大学出版会 二〇一三・二刊

A5 六三七頁 七四〇〇円

本書は「日本中世において成立したさまざまな宗教テキストの体系把握」を課題としたものであるとするが、本書が素材とする「テキスト」とは、「狭義の文字資料としての文献に限らない、文化の所産であり、媒体として創出されるところの記号と表象を指している」と定義されている。もう少し具体的にいうならば、これら宗教「テキスト」とは、主に仏教と神道を対象としたものであり、聖典、儀軌、法則などの聖教や、縁起・日記などの記録類とよばれる文献史料にとどまらず、図像や絵巻などの絵画史料にも及び、さらに儀礼の空間に存在する建築や荘厳、道具も含むものという。本書ではこれらの「宗教テキスト」の本文分析はもちろん、それらが歴史や文化の上で如何に生成され、受容されたのかについても検証されている。たとえば密教儀礼における「テキスト」の生成を挙げるならば、まず根拠としての經典や儀軌が備えられ（典拠テキスト）、実践のために次第を記した法則、作法が用意され（儀式テキスト）、それらの密教事相書の中には、堂荘嚴を指示する差図や壇図、本尊や曼荼羅の図像が記される（図像テキスト）。儀礼の記録としては日記が作られるが（記録テキスト）、この中には儀礼（修法）の効験や感応の逸話や本尊の因縁や縁起が

添えられることもあるという（神話テキスト）。また日記の中には、儀礼で用いた表白や願文が記録されることもあるが、これらが後に集成されることもあるという（文芸テキスト）。このように一つの儀礼を通じて、多くの位相からなるテキストが生み出されることが知られる。

本書の構成は四部からなっており、第Ⅰ部「聖徳太子宗教テキストの世界」（第一章～第四章）では、「偶像」としての聖徳太子に関わる図像や絵伝、伝記などのテキストを取り扱う。第Ⅱ部「寺院経蔵宗教テキストの世界」（第五章～第九章）においては、一切経、聖教目録、灌頂儀礼にまつわる事相聖教などのテキスト、第Ⅲ部「儀礼空間宗教テキストの世界」（第十章～第十四章）では、修正会・修二会等の儀礼テキストの中でも主に、声明・唱導・願文などの「読む」テキスト、第Ⅳ部「神祇祭祀宗教テキストの世界」（第十五章～第十八章）では、熱田宮・真福寺に伝来する神祇テキスト、真言密教の中での神道テキスト、さらに修験道における縁起や図像テキストを通して、テキストの体系化が試みられている。

以上、本書は数多くのテキストを博搜し、幅広い学識に裏打ちされた大著であり、その成果をまとめ、意見を述べることは容易ではない。そこで最後に個人的な感想を述べることで小稿を閉じさせていたきたい。私自身、本書に数多く引用される『醍醐寺史料』の目録を刊行する仕事をしているため、『醍醐寺史料』に触れる機会は少なくない。そうした中で興味を持ったのが、第Ⅱ部で取り上げられている、テキストを生み出す主体としての慈円や守覚の存在とその役割である。その理由は醍醐寺にも同様の役割

を果たした僧侶の存在―南北朝期の隆源、安土桃山期の義演―を想起したためであり、当然、他の史料群の中にもこうした僧侶の事例はみられるであろう。このように本書はテキスト論の分野のみならず、歴史・文化・文学などの多種多様な分野に問題を提示し、研究の進展を促すものになることは間違いない。(藤井雅子)